

# 家庭教師 X 世

n a o m i

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どこにでもいそうな、無気力な高校生が出会ったのは。裏社会のボスだった。

本編終了後約10年経過しています。

# 目次

それぞれの10年

EP1	出会い	1
EP2	彼の名は	6
EP3	家庭教師	11
EP4	雨のスポーツマン	15
EP5	雷のタレント	20
EP6	晴のチャンピオン	26
EP7	並盛財団	35
EP8	雲の風紀	39
EP9	招待状	44
EP10	霧の秘書	50
EP11	跳ね馬のファッション	



## それぞれの10年

## EP1 出会い

俺の名前は「大谷 吉常（おおたに よしつね）」。

並盛高校3年。受験を控えたどこにでもいる高校生だった。

あの人と出会うまでは…

それは夏休みが明けて間もない頃だった。といってもクラスは受験モードまっしぐら、常にピリツとした空気が流れていた。

「大谷、先生が呼んでたぞ、今度は何やったんだ」

「石田 鈴（いしだ すず）」やたら俺に絡んでくるクラスの女子だ。

「なんもしてねーよ、つたくあの先生細かいんだよなー」

「早く行ってきなよ」

「へいへい」

職員室へ向かうとその先生が職員室の前で立っていた。

「大谷くん。進路希望調査票が白紙じゃないですか。どういふことですか」

三浦 ハル。俺のクラスの担任で『夢』だの『将来』だの『夢見る少女』感の抜けな

い残念な先生。

「特に将来なりたいたいものとかないですし、進学するつもりもないです」

「デンジャラス。それじゃあ先生大谷くんの応援が出来ないじゃないですか」

「別に先生に応援してもらわない必要ないんですけど」

「がビーン。先生ショックです…とにかく今日中に書いて提出してくださいね」

気がつけば他の生徒は誰も居なくなっていた。

(もうこんな時間かよ……つたく三浦のヤツ書いたんだから、さっさと開放しろよな)

日が落ちはじめた頃、学校を出ると三浦が誰かと校門前で話していた。

「久しぶりですね。いつ日本に」

「ちようどお昼頃かな」

「どのくらい日本にいるんですか」

「彼は3日間って言ってたよ」

「おー。じゃあ普段会えない分沢山甘えちやいますよ」

「もう。ハルちゃんったら」

「彼はどこに」

「今日は、仕事だから多分会えないんじゃないかな」

「そうですか…。では久しぶりにスイーツ巡りしますか」

「大丈夫。お仕事今、終わったんでしょ」

「大丈夫です。行きましょ」

「ふふ、相変わらず元気だなハルちゃんは」

（綺麗な人だな…あんな美人で賢そうな友達三浦にいたんだ。それに【彼】って三浦がよく豪語してた【凄い彼氏】ってその人のことか…）

翌日の昼休み。俺は三浦を探した。

（三浦のことだ…きつと電話での話し声もデカイはず…）

「はい…そうですか今【並中】に…ありがとうございます。仕事終わり次第直ぐに向かうです」

（並中…って並盛中学のことだよな…なんでだ）

俺は学校を早退し、並中へ向かう。

（この道を抜ければ並中に一直線）

「きやあ」

「うお」

出会い頭に人とぶつかってしまった。

「すみません。大丈夫ですか」

「こちらこそ。すみません。大丈夫です」

(昨日。三浦と話してた美人さん近くで見たらスゲー可愛いじゃん)

「あの…なにか」

「えっ、いや…あの、急いでるんで失礼します」

並中に到着するも当然ここも授業中…

(まさか…もう中にいるのかその人)

「おい、お前そこで何してる」

並中の先生に見つかり焦る

「見たところ並高の生徒だな」

俺は捕まり、並中の先生が連絡を取っている間生徒指導室に軟禁された。

(見たところ普通に授業中…仮にその人がOBだとしても行けるスペースは限られてるよな)

俺はこっそり抜け出し、階段を駆け上がる。

(俺の予想が当たってれば…)

勢いよく最上階の扉を開ける。

辺り一面に広がる空とフェンス

(誰も…いない)

戻ろうとすると



「君…誰だい」

上から人が飛び降りて来た。それが俺とあの人の出会いであった。

## EP 2 彼の名は

「あれ、その制服って並高だよな」

飛び降りて来た男は、ツンツン頭でどこか頼りなさそうな印象だった。

「えっ、はい。まあ」

「ハルのヤツ元気かい」

「ハルって…もしかして、三浦ハルですか」

「そう。あいつ俺の知り合いなんだ」

（この男が三浦の…どこがいいんだろう）

「あいつ大変だろ、色々」と

「そうですね…」

「三浦先生に会いたいならら並盛高校に行った方が早いのでは」

「いや…別にハルに会いに来たとかじゃないし」

「そうなんですな。なんか三浦先生『久しぶりに彼氏に会える』って大はしやぎでした

よ」

「いや、俺ハルとは中学からの長い付き合いだけど、彼氏ではないし」

(三浦妄想癡強そうだもんなくあいつの勘違いか)

「今、何してるんですか」

「少し、仕事抜け出して思い出に浸ってたんだ」

「思い出…」

「ここは、今の『俺』を作ってくれた大切な場所だから」

(並中が…)

「俺が中学の頃雇ってた家庭教師が超スパルタでさ、何度死んだか」

(いやどんな家庭教師だよ)

「えっ、死んだって今貴方ここにいるじゃないですか」

「ああ、ちよつと色々あつてね何度も死んでるんだ」

(頭大丈夫かこの人)

「ここで出会った人達とは未だに遊んだりしてさ、本当に懐かしいよ…」

(フェンス越しに遠く眺めてるけど、見た目のせいかなあんまカッコよくない)

「ところで、君はなんでここに。並高も授業中だろ」

「えつと、まあサボりです」

「そっか」

「…叱らないんですか」

「俺も学生の頃よくサボったりしてたから、あまり人に強く言えなくて」  
（…三浦どんなどに惚れてるんだろう）

「おい、沢田そろそろいいか」

さっすきの先生が男を呼びに来た。

「その並高生。担任が迎えに来たぞ」

「わざわざ、迎えに来るなんて元気な先生だな」

「その…俺の担任…」

校門に近づくと

「大谷くん。なにをやってるんですか全くもう…つてツナさん」

「よお、ハル久しぶりだな」

「お元氣そうでよかったですくちやんとご飯食べてますか、苛められたりしてませんか」

「お前は俺の保護者か」

「ハル心配で心配で」

「京子ちゃんいるし、心配ないよ」

「それもそうですね。京子ちゃんも元氣そうで良かったです」

「会ったのか」

「はい。スイーツ巡り久しぶりにしてきました」

「昨日京子ちゃんの食欲が無かったのはそのせいかな」

「それは私は知りませんが。ところでツナさんいつまで日本に」

「明日にはあつちに帰るよ」

「そうなんですか…」

「あれ、お兄さん今海外に住んでるの」

「はひ、大谷くん当たり前ですよ、彼の名前は『沢田綱吉』総合複合企業『CEDDEF（チエデフ）』のCEOです。本社はイタリアにあるのでイタリアに住んでらっしゃるんですよ」

俺は暫く頭がその事実には追い付かなかった。

総合複合企業『CEDDEF（チエデフ）』はあらゆる分野で常に業界上位に入る世界トップクラスの 대기업だ。

イタリアで誕生し、100年近く続いているなんて都市伝説もある。

その会社のトップが日本人なのにも驚いたが、その日本人が目の前にいるこの頼りなさそうな男というところに俺は驚いた。

「おい、ハルそろそろいいのか学校に戻らなくて」

「はひ、大変です。大谷くん戻りますよ…あー」

突然大声を出す三浦。

「なんだよハル、突然」

「ツナさん、お願いです。この大谷吉常くんの家庭教師になって下さい」  
「はあー」

俺達は三浦の提案に唾然となった。

## EP3 家庭教師

ハルからの提案に度肝を抜かれた二人。

「なに言ってるんだよ、ハル」

「大谷君。将来の目標が無くて困ってるんです。ツナさん助けて挙げて下さい」

「三浦先生。別に俺将来に困ってません」

「進路希望調査票白紙だったじゃありませんか」

「特に就きたい職業とかないので成るように成ればいいかなって思って」

「甘い。甘過ぎです大谷くん、この世の中そんな甘い考えでは生きていけません」

「まあまあハル。将来なんてそんな急に決められることじゃないんだから」

「それを、サポートするのが私達大人の義務です。特にツナさんは大谷君に色々な可能性を示して挙げる事が出来るじゃありませんか」

（あのCEDEF（チエデフ）のCEOだもんな…）

「それに俺は明日イタリアに戻るんだ。そんな時間無いよ」

「滞在を延長すればいいじゃないですか」

「予定が詰まってるんだよ」

「沢田さんでしたっけ」

吉常は深々と頭を下げた。

「お願いします。俺に教えてもらえませんか沢田さんが示せる可能性を」

「えっ。どうしたの君急に」

（こんな大企業のトップのコネを持てれば将来は安泰だ）

「ほらツナさん。悩める若者が救いを求めていますよ」

「お願いします。沢田さん」

深々と頭を下げる二人にツナは

「…はあ。わかったよ可能な限り見て挙げるよ」

「そうと決まればツナさんよろしくお願いします。私授業があるので」

「おい。彼は」

「はひ。彼は早退してますので今日は学校には戻れません。ではシーユーアゲインです」

ハルは足早に去っていった。

「…えつと大谷吉常君だったよね。改めて沢田綱吉です。よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「じゃあ。まずは何を知りたいの」



「CEDEF（チェデフ）に入社するにはどうすればいいですか」

「どの部門」

「…どの部門ですか」

「CEDEF（チェデフ）は様々な部門で成り立つ企業だからね。希望場所によつては求められる能力も変わってくるんだ」

「…なるほど」

「まあ前提条件として。英語とイタリア語をマスターしていることくらいかな」

「…まずはそこからですね」

「学力とか実績は募集要項には高めに設定してるけど、正直採用にはあまり重要視してないかな」

「じゃあ。どうやって決めるんですか」

「うーん。その人がうちで【何を成し遂げたい】かその成し遂げたいことに【どれだけ覚悟を持って挑むのか】かな」

「成し遂げたいこと…その覚悟…。俺にそんなのはないですね…」

「まあハルとのやり取りを聞いてたらそうだよな。まずはそこからか。どうしようかな」

ふと携帯が鳴る。ツナのだ

「もしもし…久しぶり。元気だよそっちは………今から会えない。ちょっと助けて欲しいことがあってき…うん。ありがとう。じゃあそっち向かうね」

電話を切るツナ。

「よし吉常君。移動しよう」

「移動…ってどこにです」

二人が着いた先は

「ここって、並盛スタジアムですよね」

「そう。俺の中学の頃からの親友が働いているんだ」

「よおツナ。久しぶり」

二人を見つけてユニフォーム姿の男が近付いて来た。

## EP 4 雨のスポーツマン

「山本。久しぶり調子良さそうだね」

「ハハ。今年も絶好調だぜ」

（山本武：プロ野球チーム『並盛ウオリアーズ』の4番。入団1年目から主力として活躍して今年は三冠王に期待が懸かる日本を代表するプロ野球選手じゃん。この二人知り合いなの）

「こいつがツナが電話で言ってた高校生」

「うん。大谷吉常、ハルの生徒みたいなんだ」

「へえー三浦の。楽しそうなクラスだな」

「まあ…楽しそうですよ。先生は」

「なんだヨシツネだっけ。お前は学校楽しくないのか」

「…」

「人それぞれだしな、別に責めてる訳じゃないぜ。友達はあるか」

「それなりに」

「かけがえのない大切な友達を1人でも作った方がいいぜ」

「人との繋がりがりってそんなに大事ですかね」

「そのうちわかるさ」

ヨシツネは気がつくど並盛ウォリアーズのスタジアムのグラウンドに立っていた。

「えー今日1日私の知り合いの懇願でうちの練習を体験をすることになった並盛高校の生徒さんだ。皆仲良くしてあげてくれ」

「大谷吉常です。よろしくお願ひします」

選手達は当たり前のように迎えてくれていた。

「山本。彼のこと責任を持って見ているようにな」

「うす」

「あーそれとこのこと球団に通してないからオフレコでな」

「監督また好き勝手やって大丈夫ですか」

笑い合う人達に吉常はただただ困惑していた。

（大丈夫なのかこのチーム…）

ウォーミングアップはランニング50周に腕立て×1000腹筋×1000の至ってシンプルなお出だしだった。

「はあーはあー」

「まだウォーミングアップだけ、大丈夫か」

「大丈夫です」

（これってウォーミングアップなんだよな…）

ウォーミングアップを終えキャッチボールが始まる。

「ヨシツネは部活やつてるのか」

「小学生の頃に野球をしてました。今はなにも」

「部活は目標を立てやすいからよ。やるといいぜ」

（隣のペアのミット音響してるんだけど、キャッチボールだよね…）

その後も練習は続き。本日最後のメニューは紅白戦であった。

「ヨシツネ大丈夫か」

「だい、じょうぶ、です」

「無理はすんなよ」

「は、い」

吉常は山本の次でDHとして入った。

（山本選手はやっぱりスゲーな。あんなハードな練習で笑顔を絶やさずに）

バッターボックスに立つ吉常。

（あの投手…凄い気迫だ。でも高校生相手になんでそんな剥きに…）

相手投手の投げたボールは吉常の胸スレスレを通過する。

(あぶねー。デッドボールものだけあれ)

それからもあつというまに打ち取られてしまった。

日が沈み始めた頃。練習は終わった。

「お疲れ。どうだった」

「…想像以上に過酷だった」

「そっか」

「おう。二人ともお疲れ様」

「山本。今日はありがとう」

「どうだヨシツネ。何を感じた」

「プロの世界って華やかなのになって思ってたけど、全然違った。高校生の俺相手に皆さん容赦無かった」

「…外から観たらスポーツ選手は皆華やかに見えるかもしれないねー。けど俺達はこれで生活していかな、皆1日1日が必死で勝負なのさ。これはどの職に就いてもそうだと思うぜ」

「えっ…」

「形は違えどその仕事でメシを食うって決めた以上少しでも怠ければどんどん追い詰められていく。世の中ってのはそういうもんだ」

「山本さん…」

「頑張つて自分の進む道を決めな、時間はあるようで全然ないぜ」

「ありがとうございました」

手を振り山本はスタジアムへと戻っていった。

「今日はもう遅い。気をつけて帰りな」

「あれ、もしかしてツナ兄」

振り返るとクリーム色の長髪の青年が手を振っていた。

## EP5 雷のタレント

「はい。お疲れ様です。30分休憩です」

吉常はツナと一緒にとあるスタジオ収録の現場に来ていた。

「フウ太。この撮影いつまで早く遊びに行きたいよ」

「この後は14:00までこの撮影で16:00にはBスタジオに移動して別の収録。2

1:00からは取材が3件。今日は諦めなランボ」

「つたく、ランボのやつ相変わらずあの調子なのか」

「そうなんだツナ兄。その時の気分でコロコロ変わるから大変だよ」

（ランボ・ボヴィーノ。最近注目の若手俳優、その甘いルックスで若い女性から人気を集めてるって雑誌に載ってたな、そんな人ともこの人知り合いなのか）

「あの綱吉さん。ランボさんとはどういった間柄なんです」

「ランボとこのフウ太は俺の異兄弟ってのかな、中学の頃に出会って居候してる内に家族になってたんだ」

（どんな状況だよ。ってかまた中学の頃か…この人中学生の頃何があっただんだ）

「おい、ランボいい加減にしろ」



「兄貴ー。久しぶりに会ったんだから遊んでくれよ」

「お前が仕事をキツチリ勤めたらな」

「本当にか、俺様頑張るもんね」

「まったく世話の焼けるやつだな」

「でもツナ兄この学生さん。こんなところに連れて来て良かったの」

「ハルから色々な体験をさせてあげて欲しいって頼まれていろんな職場を体験させてるんだけど、やっぱりマズイよな」

「そう思うよ。彼も僕達みたいに例のプログラムを受けさせるの」

「いや。彼には俺達のことほとんど話してないからやめたほうがいい」

(例のプログラム…)

「あの、例のプログラムって」

「C E D E F (チエデフ)である特定の人達が使っている教育プログラムなんだ。年齢に関係無く能力に応じて社会ステータスを得られるシステムなんだ」

「すげー」

「フウ太もランボもこのプログラムを使っているから君よりも年下だけど今のステータスを手にしている」

「えっ、二人とも俺より年下なんですか」

「僕達。年齢で言えば中3や高1なんだ」

「えっ…フウ太さんって凄く大人びてるけど年下なの」

「だから呼び捨てで構わないよ。吉常くん」

「でも何故そのシステムは限られた人達なんですか」

「各国の偉い人達も知らない独自のシステムだからさ。それに強制的にその年齢以上の教養を学ぶことになるからね危険も伴うんだ」

「危険…ですか」

「うん。年齢に応じて段階を踏んでゆつくり教養を身に付けた方が人間の脳に取っては負荷がかからず良いんだ。それを強制的に学ばせるから、未発達な脳がパンクして精神崩壊を起こしてしまう可能性があるんだ」

「そうなんですか…」

「だから日本の教育システムで順調に学んでいる君にそのプログラムを適応する気は無  
い。それに高校生はある程度脳の発達が完了していて効果も薄いからね」

「ところで、なんでここに連れて来たんですか」

「職場体験急にさせて貰える場所ってさ、実は結構限られてるんだよね、それこそツテが  
無いと。俺が今頼める人に片っ端から頼むところいう特殊な職業になっちゃうんだよ」

（今のところ予想外の職場体験ばかりんですけど…ずっとこんな感じってこと）

「それにこういう世界って割りと憧れる人多いじゃない」

「確かに：：：そうですけど。俺興味持ったこと無いです。目立つの嫌いなんで」

「：：：」

「どうするツナ兄」

「急に頼んだことだし、最後まで見学させてもらおうよ」

その言葉を聞き二人は徒労感に包まれた。

「悪いなフウ太。急にアポしたのに」

「しょうがないよ。吉常君と会って間もないなら彼のことよく知らないのは当然だし」

「ありがとうございます。この世界の裏側を見て貴重な体験でした」

「そう思ってもらえたなら良かったよ。頑張ってたね」

「ツナの兄貴俺様とこの後遊ぶんだろ」

「この子を家まで送り届けたらな」

「絶対。絶対だかんな」

「わかった、わかった大人しくフウ太と待っていてくれ」

（テレビで見るランボって、とても大人びて見えるけど。結構言動幼稚なんだな：：：こんな感じでも働ける：：：不思議な職場だ）

帰り道。二人は微妙な空気の中静かに歩いた。

（沢田さんの顔に泥を塗るようなこと言っちゃたからな、気まずい）

「ごめんね吉常君」

「えっ、なんで沢田さんが謝るんですか」

「俺の思い込みで動いたせいで、君の貴重な時間を無駄に動いてしまった」

「そんな。あの業界の裏側見れるなんて本当貴重な体験させてもらいましたよ」

「そうかい…ならいいんだけど」

（早くこの場から立ち去りたい）

「吉常君はどんなところが見たい」

「普通にサラリーマンが働く会社が見たいです」

「サラリーマンって言われても会社の数だけ色々な形があるんだよな…」

「CEDDEF（チェデフ）の仕事…いや沢田さんの仕事を見せてください」

「俺の。俺の仕事を見るならイタリアに行かないとな…」

「日本にある支社じゃダメなんですか」

「…まあ出来なくも無いけど、どうするか」

「見つけたぞ沢田」

「この声はお兄さん」

(なんだ今の度でかい声。今何時だと思ってるんだよ)

あまりの音量に耳を塞ぐ吉常。その刹那、ツナは男に殴られた。

## EP 6 晴のチャンピオン

「沢田さん」

男に突然殴られたツナ、あまりの出来事に吉常は困惑した。

困惑する吉常を他所にその男は透かさずツナの胸ぐらを掴んだ。

「大丈夫。気にしないで、お久しぶりですお兄さん」

（えっ、知り合いなの）

「よくノコノコと日本に帰って来られたな沢田、また約束を破っておきながら」

「すみません。お兄さん」

（約束…破る…てかお兄さんってどういうことだ）

「なんだこのガキは」

「ガキって、俺学生ですけど」

「そうか。それはすまなかつた」

「沢田さんを離してください」

「なんだ沢田の知り合いか」

胸ぐらから手を離す男。

「ハルの学校の生徒です」

「学生を連れて何をしとるんだ。貴様は」

「ハルに頼まれて職場体験をさせてるんです。お兄さん」

「職場体験だと、この時期の学生は勉強に精を出しているはずだろう」

「それが将来の目標が定まらなくて悩んでいるんです」

「フム：丁度いい。俺の職場を見学させてやろう。沢田お前が俺の相手をしろ」

「待つてくださいお兄さん。俺明日イタリアに戻るんです」

「そんなことは知らん。お前の『罪』を清算することの方が先だ」

（なんだこの人無茶苦茶だー）

「沢田さん。なんなんですかこの無茶苦茶な男」

「俺の名は笹川了平。沢田の知り合いだ」

「あんに聞いてない」

（笹川了平って2階級制覇中のボクシングのチャンピオンじゃんか。沢田さんの人脈どうなってるんだよ）

「いや、あなたチャンピオンってことは一般人殴っちゃダメでしょ」

「沢田はこの程度では死なんぞ」

「そういう問題じゃ無いでしょ、プロライセンス持った人は一般人殴っちゃダメなんで

しよ」

「そんなことは俺と沢田の間では関係無い」

（この人イカれ過ぎだろー）

「吉常君。大丈夫」

「沢田さんでも…」

「わかりましたお兄さん。いつ伺えばいいですか」

「明日の朝5時だ」

「わかりました」

「そのの学生。職場見学をしたいならその時間に『並盛ジム』に来い」

「大谷吉常です。ボクシングに興味は無いけど、こんな犯罪行為見過ごせないんでお邪

魔します」

「うむ。ボクシングの素晴らしさを見学して行くといい」

そう言いい了平は走り去って行った。

翌朝。

（並盛ジムって確か、あった。沢田さんとあの人三浦の知り合いの美人さんもいる）



「ごめんねツナ君。お兄ちゃんがまた無茶言つて」

「お兄さんとの約束を守れなかったからね。これは必要なことだよ」

「でも…」

「沢田さん。おはようございます」

「おつ、吉常君おはよう」

「ツナ君この子は」

「ハルのところの生徒さんで、大谷吉常君。訳あつて俺がここ数日面倒見てたんだ」

「わーハルちゃんの生徒さんなんだ。笹川京子ですよろしくお願いします」

「大谷吉常です。…あの笹川つてもしかして」

「ああ京子ちゃんはその人の妹なんだ」

（嘘だ…絶対嘘だ）

「おう沢田来たな」

扉を開けて既に戦闘準備万端の了平が出てきた。

「吉常とやらも来たか」

「ええ…」

「お兄ちゃん。どういふことなんでツナ君を殴つたの」

「きよ、京子。なんでお前がここに」

(本当にこの二人兄妹なんだ…)

「私が話しておいたからね。久しぶりだね京子と沢田」

奥から女性が1人出てきた。

「どういうことだ」

「京子から昨夜電話があつてね『沢田の頬が誰かに殴られたみたいに腫れてるんだけど、本人が話してくれないのどうしたらいいかなって』そしたらアンタが丁度沢田と決闘するなんて言うもんだから、京子に教えたのよ」

「余計なことをせんでいい」

「中学からのダチが心配そうに相談してくるんだ。手を貸すに決まってるんだろ」

「花…」

(沢田さんあの人は誰です)

(笹川花。旧姓『黒川花』、俺と京子ちゃんが中学の頃からの付き合いの同級生で。お兄さんの奥さんなんだ)

「聞いてしまったのなら仕方ない。リングに上がれ沢田。始めるぞ」

「ちよつとお兄ちゃん」

「これは『男と男の約束』なんだ京子。京子は帰っている」

「なんでそんなことでツナ君とお兄ちゃんが」

「京子ちゃん大丈夫。これは俺のケジメとして必要なことなんだ」

「ツナ君……」

リングの上に立つ2人の男と見守る3人

（沢田さん華奢な身体だと思ってたけど。凄くしつかりした身体付きしてるな……）

「あの……花さんでしたっけ」

「なんだ三浦のところの生徒。大谷だっけ」

「二人の約束の内容ご存知ですか」

「いや。知らない……ただ予想だけど京子がらみだと思うよ」

「京子さんがらみ……ですか」

「二人の共通点は京子だからね……まあ女の勘だけど」

決闘が始まる。

（沢田さん現役世界チャンピオンの攻撃全部かわしてる。マジでかこれ）

「身体は訛ってないようだな」

「日々の鍛練は行ってますから」

「なのに何故だ。何故あの約束は守れんのだ」

「……」

「答えろ沢田……」

了平の渾身の右ストレートがツナの頬に当たる。ツナは一瞬で力が抜けたように膝から崩れ落ちた。

「ツナ君」

京子は透かさずリングに上がる。了平をじっと見詰める。

「京子…」

「お兄ちゃんの馬鹿」

「うっ」

「京子ちゃん。お兄さんを責めないでこれは俺の罪にたいする罰だから」

「ツナ君でも」

了平が差し出す手にツナが捕まる。

（頼んだぞ沢田）

（はい）

鎮まりかえるジム。

「…これがボクシングだー」

（いや、テレビで放送されるような光景見せてくれ。いくら場を盛り上げるためだとしても、ボクシングの魅力伝わらないよ）

「…無理矢理過ぎ、そんなんでボクシングの魅力伝わると思ってたの」

「勿論だ。なあ大谷吉常」

了平以外の人達は彼の表情で察した。

「なんだ京子。お前まで何故そんな目で見ろ」

「悪いね。この男こういう奴でさ、良かったら今日の放課後また来な、本当のボクシングの魅力を見せてやるよ」

「ありがとうございます。花さん」

「京子達はどうする」

「俺達は予定通り。イタリヤに戻るよ」

「行くんですか」

「うん。あつちでの仕事をほっぽり出す訳にはいかないからね、なるべく時間作って日本に戻るからさ。頑張つて自分の道を見つけない」

ツナは一枚の写真を取り出す。

「…俺のいない時はこの人を頼りな、話は通しておくから」

ツナ達と別れた吉常はその日登校した。

「あんた、この数日なにしてたの」

「お前には関係ねーだろ石田」

「サボリ」

「うるせー、三浦の知り合いに人生相談してたんだよ」

「三浦先生の知り合いってどんな人よ、成果はあったの」

「お前に答える義理はない」

窓から見える飛行機の後を目で追う吉常。その日の吉常は空を眺める時間が多かった。

## EP7 並盛財団

ツナと過ごした濃厚な3日間から1週間近く経ったある日、吉常は外の騒がしきで目が覚めた。

寝起きのまま窓の外を覗き込むと、自宅の前を黒服の集団待ち構えていた。

(俺なにかしたっけ)

恐る恐る玄関を開けると視線が集まる。黒服の男達が一瞬で左右に分かれ膝に手を付き頭を下げた。

「あのー。どちら様ですか、近所の人達に迷惑なんでやめてもらいたいですけど」

「これはこれは大谷さん。失礼致しました」

リーゼント頭の男が吉常に話しかけてきた。

「私は草壁哲矢と申します大谷さん。沢田さんからお話しは伺っています」

(ツナさんから貰った写真の人…本当にリーゼントなんだ)

「あの、これはどういう」

「車を用意しています。話しはそちらで」

初めて乗るリムジンに思わず目を輝かせる吉常。それをよそに草壁は話し始めた。

「改めて過ぎた挨拶をしましてすみませんでした。私は並盛財団副理事の草壁哲矢です」

「並盛財団…」

「この町にお住まいでしたら。ある程度私達の組織についてはご存知かと存じます」

（並盛中のある年代の人達が結成したと言われている財団法人。金融面を中心にあらゆる分野の会社と業務提携して運営されて、特に並盛に関わる案件には全て関わり噂では並盛町を裏から支配してる組織だったよな）

「あの…ツナさんとはどういった関係なんです」

「一概には表現出来ません。並盛出身の同志、昔のよしみ、ビジネスパートナー…そういったところですかね」

「ビジネスパートナーですか」

「まあCEDDEF（チエデフ）ではなく沢田さん個人との契約になるので表立って表明はしていませんがね」

「それでこれからどうするんですか」

「これから1週間。様々な職場を体験して頂きます。体験先と貴方の学校に根回ししていたのでご挨拶に伺うのが今日になってしまいました」

「学校に根回しして」



「貴方の休学手続きやそれに伴う成績の処遇についてね。この職場体験中の期間は校外学習の扱いとして学校の記録に残り成績に影響は出ません。安心して自分の行く道を探してください」

証券会社に建設現場、農家や漁船、役所、不動産、研究所…様々な職場を一気に体験することになった吉常。

「これで体験を予定していた職場は全て周りました。大谷さん1週間お疲れ様でした」

「ありがとうございます」

「どうでしたか、何か掴めましたか」

「学ぶことは沢山ありました。でも目指したいと思ったところは…」

「そうですか…」

「すみませんここまでして頂きながら」

「自分の道は人に強制されるものではありません。気にしないでください。これで我々が沢田さんから受けた依頼は終わりです。大谷さんが自分の納得のいく未来を見つけることが出来るのを陰ながら応援しております」

「理事長。今副理事は面会中です」

急に部屋の外が騒がしくなった。

「なに勝手にやってるの」

「いや、理事長にもお話は通しているはずですが」

「知らないね」

勢い良く襖が開き、1人の男が立っていた。

「恭さん」

小鳥が一匹彼の肩に降り立った。

## EP8 雲の風紀

彼の持つ威圧感に吉常は圧倒されていた。

(なんだこの人。爽やかな表情しながら獲物を虎視眈々と狙うような感じ)

「恭さん。お疲れ様です」

「草壁。誰その子」

「沢田さんから連絡のあった大谷吉常さんです」

「ふーん。興味無いな」

「大谷くん、この方は雲雀恭弥。並盛財団の理事…つまりトップに立つ男です」

「よろしく…お願いします」

「君。今から僕に付き合う気ある」

「えっ」

「ちよつと用事があつてね。色々な仕事を体験したいんだってね、ついてこれば見られるよ」

「恭さん。それはちよつと」

「いずれ沢田綱吉の本当の姿を見るかもしれないだろう。いい機会じゃないか」

(ツナさんの本当の姿…)

「お願いします」

「大谷さん。よろしいんですか」

「はい。よろしくお願いしますます雲雀さん」

「じゃあ付いてきて、草壁。今回の僕の活動報告書、お置いておくから整理よろしく」

「へい。お二人共お気をつけて」

(危険な職場なのかな)

並盛の町を歩く二人。吉常には町の人々が自然と二人から距離を取っているように感じた。

「着いたよ。ここが今日の仕事場だ」

そこは並盛の町中にある路地裏…

「ここで…仕事ですか」

「おいあんたら、なにしてんだ」

奥からガラの悪そうな連中がゾロゾロと現れる。

「丁度いい。獲物がやって来た」

「雲雀さん。獲物って」

すると、雲雀はその中の一人の溝に拳を当てた。その者は一瞬で口から泡を吹き、白

目になり倒れ込んだ。

「おつ、おいテメーなにしゃがる」

「嘯み殺されたくなければ、君達を雇つてる人間を早く呼んできな」

そうは言いながら雲雀は次々と殴り倒してゆく。あつという間にあと一人：

「さあ。どうする」

「あつ、いや…その…」

顔を殴られ地面に叩きつけられる。ひたすら殴り続けるそのあまりの光景に吉常は呆然としていた。

「雲雀さん止めてください。その人死んじやいますよ」

「別に構わないよ。並盛の風紀を汚す者達は生きて還すつもりないし」

「わかった。話すから、止めてください」

身体を震わせながら、その者は雇い主のことを話した。

「…そうか」

再び、雲雀は殴り始める。

「雲雀さん待ってください。この人はもう話したじやないですか」

「二度と僕達に逆らわないように、身体に覚えさせなきやね」

「あつわわわ…ぐわー」

断末魔が路地裏に響き渡った。

「彼が言っていたのはここだったね」

とある建物にいた二人。

「全国に支部を持つてゐるって噂のヤクザ組織『三条会』の事務所。本当に雲雀さん一人で」

「さあ、行くよ」

「うん。見ねー顔だななんか用か」

話しかけてきた男を容赦なく殴り倒す雲雀。

「君のボスは何処だい」

「そんなの言うと……ゴオハ」

（涼しい顔してやることさつきからエゲツない）

顔に飛んだ返り血を気にも止めず事務所目掛けて突き進む。

「なんだ騒がしいなさつきから」

事務所のボス清原一茂が自室から出ると血に染まり備品が散乱した事務所内と返り血を浴びに浴びた男が立っていた。

「テメーがやったのか」

「あんたがこの事務所のボス」

「…そうだ」

「こんな雑魚ばかりを従えて、よく僕の町を荒らしに来てくれたね」

「お前の町だと…」

「何人たりとも並盛の風紀を乱す輩は…噛み殺す」

（並盛を愛し、裏で支配していると言われている男雲雀恭弥。こいつがあのだ）」

日が沈み出した頃。三条会の事務所は一人の男によつて潰された。

「お二人共お疲れ様です。どうでした」

「問題無く終わったよ、お風呂入ってくるよ、君草壁に話しておいて」

「あの雲雀さん。どうして今日のことを俺に見せてくれたんですか」

「沢田綱吉のこと知りたいんだろ。僕はヒントを提示したまでさ」

「あの…並盛財団が並盛町を支配するって本当ですか」

「さあね、今日を見て君が思ったこと…それが真実さ」

恐怖を感じながら、吉常は雲雀の背中をじつと見つめた。

## EP9 招待状

「どうしたの、ブーツとして」

教室の外を眺めていると、石田に声をかけられた吉常。

「最近知り合った人達がぶっ飛び過ぎててき。なんか訳わかんないんだよね」

「どんな人にあつたのよ」

「野球選手やタレントやチャンピオンに大企業の社長」

「…あんた私を馬鹿にしてる」

「そりゃーそう言う反応になるよな。三浦の人脈スゲーは」

「三浦先生の人脈ってどういうこと」

ピンポンパンポン

「大谷吉常君。職員室まで来てください」

「俺は何もしてないからな」

「何も言っていないじゃない…」

職員室を訪れた吉常。待っていたのはハルであつた。



「大谷くん。いいですかこれは他の人に話しちゃいけませんよ」

「なんですか先生突然」

「冬休み予定ありますか」

「えーつと、一応受験生なんで勉強ですかね」

「そうですか。良かった予定はありませんね」

（いや、受験勉強はいいのかよ）

「実はですね。ツナさんから冬休みの間3日間イタリアへの旅行を招待されています」

「…それをなんで俺に」

「ツナさんが、大谷くんも来れるなら是非来てほしいって言ってるんですよ」

「本当ですか」

おもわず出た声に職員室中から視線が集まる。

「Quietです。大谷くん」

「すみません」

「なので予定が合う期間をまた教えてくださいね。それをツナさんに連絡してイタリア行きの手配をして頂くので」

「わかりました」

職員室を出ると石田が待っていた。

「なんだったの」

「お前は関係ないだろ」

「ねえ、さっきの話の続き聞かせてよ」

「さっきって」

「野球選手とかタレントに会ったって話よ」

「んなこと知ってどうすんだよ」

「いいじゃない」

「あーもう。付いてくるな」

そして冬休みに入り。イタリアへ向かう日

「えっと…なんで石田さんが」

「大谷くんが、三浦先生と二人で旅行に行く噂を聞き。これはまずいのではと真相を確かめるべく。大谷くんを問い詰めたところ事実だと言ったのでそのスクープ現場を治めにきました」

「すみません先生」

「これはですね。私の知人からの招待で決して不純な旅行ではありません」

「怪しいですね…」

「どうすれば、信用してもらえますのでしょうか」

「では…」

（女子高生に脅迫される教師…哀れだ）

吉常達は約半日かけてイタリヤに辿り着いた。

「ハルちゃん。吉常くんいらつしやい」

「京子ちゃんお久しぶりです」

「ご無沙汰してます」

「あの時はごめんねお兄ちゃんが」

「ハヒ。大谷くん京子ちゃんのお兄さんに会ったんですか」

「ええ、まあ」（未だに目の前にいる京子さんとあのチャンピオンが兄妹というのが信じられない）

「えっと…それでこの子が急遽参加することになった」

「石田鈴です。よろしくお願いします」

「よろしくね石田さん」

「急に参加人数増えるって聞いたときはビックリしたけど良かったねなんかなくて」

（これもCEDEFの力か…）

「無事に着いたところですよ。どこへ行きましようか」

「ごめんねハルちゃん。遊びに出掛けるのは初めに吉常くんの用事を済ませてからになりそうなの」

「ハヒ…大谷くんの」

「うん。ツナくんの希望でね」

（大谷。ツナって誰）

（沢田綱吉。CEDEFの社長）

（あんたの言ってた大企業の社長って…マジで）

（そうだ）

（そんな人どうやって知り合ったのよ）

（色々あってな）

「それでね。まずはツナくんの会社に行くことになってるの」

「そうですか、残念ですがツナさんにお会い出来るのならイーブンです」

「それでね。案内してくれる人なんだけど、ハルちゃんもよく知ってる人だよ」

「ハヒ。イタリアで京子ちゃん以外のお知り合いですか…」

「ご無沙汰しております。三浦殿」

「あつ貴方は」

(超イケメン…この人とも知り合い)

(いや知らない)

「お二人はお初にお目にかかりますね。拙者C E D E Fの職員『バジル』と申します」  
そこには凛々しい青年が立っていた。

## EP10 霧の秘書

「貴方が大谷殿ですね。沢田殿よりお話し伺っております。よろしくお願い申し上げます」

「こちらこそ。よろしくお願いします」

（なんかえらく一昔前の日本人口調なんだな、日本人顔じゃないのに）

「あつあの、石田鈴っていいいます。バジルさんよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくござる。石田殿」

（石田。露骨に媚過ぎだろ）

「ではお三方。ご案内しますのでどうぞこちらへ」

そうして。リムジンに乗り込む5人

（あんたなんでリムジンに乗ってそんな冷静でいられるのよ）

（つい最近乗ったからな。流星にその時は驚いたけど）

（マジで…）

「今のうちに拙者に聞きたいことがあります。遠慮なくお聞きください」

「あの、その口調は生まれ付きですか。日本人じゃないですよね」

「これは、親方様からご教授頂いていた頃の名残です」

「おっ親方様……」

「バジルさんの師匠さんはツナさんのお父さんなんですよ」

「あっそうですか……」

（ツナさんのお父さんという教え方したんだよ）

「あのバジルさんはCEDEFではどの部門で働かれているんですか」

「拙者は諜報……ある部門の調査員です」

「調査員ですか」

「はい。各国へ行き情報を集めたり、その時の市場や物流の流れを調査し会社へ報告し、そこから会社の方針が定まっていくこともあるので、大事な役職です」

「あの。京子さんは何されているんですか」

「私。私は手芸教室を開いたりすりけど、特にお仕事には就いてないかな」

「京子ちゃんにはツナさんを支えるパートナーという重要な事がありますからね」

「ハルちゃん。止めてよ恥ずかしいよ」

「結婚されてるんですか」

「ううん。一緒に暮らしてはいるけどしてないよ」

「どうしてですか」

(石田。深掘りし過ぎだ)

(何あんたツナって人に妬いてるの)

(そんなんじやねえー)

「ツナさん。まだプロポーズしてないんですか」

「うん」

「…」

(バジルさんは理由を知ってるのかな)

「さあ、着きましたこちらです」

CEDEF本社に到着し玄関を通ると眼帯をした女性が立っていた。

「クローム殿。只今三浦殿達をお連れしました。沢田殿へ連絡お願いします」

「はい」

(ツナさんの知り合いにしては珍しく少し暗そうな方だな…)

「クロームちゃん。久しぶりだね」

「京子ちゃんにハルちゃん。久しぶり」

「どうですか秘書のお仕事は慣れましたか」

「うん。それなりに」

(バジルさん。彼女はツナさんの秘書なんですか)



「はい。『クローム髑髏』彼女は沢田殿の秘書を勤めています」

「皆さんはお元気ですか」

「私は teacher 生活をエンジョイしています。ビアンキさんとイーピンちゃんも元気でですよ。イーピンちゃんなんて小森女学園という女子高の現役女子高生です」

「そっか、良かった。またあとでね。ボスの元にこの人案内しなきゃ」

「はい。お仕事終わったらスイーツ巡りしましょうね」

「うん。またね…大谷さんお待ちせしました」

「では、拙者はこれで」

ツナのいる部屋に向かう2人。

「あのクロームさん。左目は怪我されているんですか」

「これはボスよりも前に出会った大切な人との繋がりの証」

（誰だろう…）

気がつくところある部屋の前に立っていた。

「ボス…大谷さんを連れて来ました」

部屋の中ではツナは金髪の好青年と話しをしていた。

## EP11 跳ね馬のファッション

「吉常くん。よく来たね」

2人が部屋に入るとツナは会話を止め立ち上がり、歩み寄った。

「あとクローム。ボスって呼ぶのはダメだつてば」

「…私にとつてボスはボスだから」

「しょうがないな、あまり外ではボス呼びしないでね」

「ハハハ、元気そうで何よりだツナ。そいつが例のツナ初の弟分か」

「そうですディーノさん。大谷吉常くんです」

「俺はディーノ。ツナは同じ師を持った弟分になる。よろしくな」

「よろしくお願ひします」

「どう。目標は定まりそう」

「それが…」

「そつか。難しいよね」

「それでツナ。吉常を預かればいいんだな」

「えっ。どういうことです」

「デイーノさんが吉常くんに仕事を紹介してくれるそうなんだ」

「仕事ですか…どんな」

「『キャバツローネ』って会社知ってるか」

「…どこかで聞いたことあるようになって感じます」

「そっか。まあ男だしな【ソツチ】方面が疎い可能性はありえる」

（ソツチ…）

「その会社のCEO…日本だと代表取締役って言うのかな、それが俺の会社だからよ。ツナの弟分に免じて特別に体験させてやるよ」

「はっはあ…あのツナさん」

「まあ折角だし。体験してみたら。その後で俺の仕事少し体験させて上げるから」

「いいんですか」

「俺の仕事に一番食い付きが良かったし、少しだけならね」

「わかりました。デイーノさんよろしくお願いします」

「へっ、ツナの前座って感じが少し引つ掛かるが、いいぜついてこい」

「あっクローム、折角ハルも来てるし暫くお休み上げるからさ。3人で遊んで来なよ」

「でもボス…」

「俺は大丈夫だから。3日間留守を守ってくれたお礼ってことで、なあ」

「ありがとう。ボス」

ロビーに降りると3人は談笑していた。

「デイーノさん。お久しぶりです」

「おつハル。えらくベツピンになったな」

「ハヒ。そんな恥ずかしいです」

（わー三浦ちよろ…）

「えつとその子は」

「鈴ちゃんです。吉常くんの同級生なんです」

（大谷。この人誰）

（デイーノさん。『キャバツローネ』って会社のCEOだつて）

「えー。貴方があの世界の著名人御用達のファッションブランド『キャバツローネ』の代表なんですか」

「ああそうだけ」

「石田鈴です。よろしくお願いします」

「よろしくな」

「デイーノさんの会社ってファッションブランドだったんですね」

「そうだ。体験してみるか」

「いいんですか。是非」

「ああ、勿論鈴もいいぜ…。そういえばクロームが休暇貰ってたからよ。3人で遊んできな」

「本当ですか。クロームちゃん」

「うん。ボスがくれた」

「流石ツナさん。じゃあ行きましょ京子ちゃん。クロームちゃん」

「じゃあ2人ともあとでね」

3人は既を楽しそうに町中に消えた。

「じゃあ。俺達も行くか」

（あんだ。とんでもない人と知り合ったのね）

（…ああ）

車での移動中、吉常はある疑問をディーノに投げ掛けた

「そーか恭弥ともあったのか」

「お知り合いなんですか」

「一応恭弥の師だ」

「一応ですか」

「まあ、恭弥は認めたらねーけどな」

「ところでディーノさんとツナさんの師匠ってどんな方なんですか」

「どんな方か…見た目は赤ん坊だな」

「赤ん坊ですか」

「またその赤ん坊が強くてよ、なんと泣かされたか。しかもその赤ん坊は俺達の師だけじゃなくてな…」

「あの…おちよくってます」

「いやいや、マジマジ。信じられないのは無理もないけどマジな話だ。実際に会わせてやりたいが、今は何処にいるのかわからねーんだよな」

「…」

2人の冷たい視線がディーノに向けられた。